

平成 2 2 年 1 0 月 1 5 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859）

市内 2 例目の木食白道作の仏像

木食^{もくじき}とは、五穀、十穀、肉類を食べず、塩や火を使って調理せずに草の根や木の実を主な食料とする修行（木食戒）です。江戸時代には数多くの木食上人^{えんくう}がおり、生涯に十二万体を造仏し祈願して廻国した円空^{えんくう}（1632～1695）もその一人です。木食行者の最高の理念は「入定^{にゅうじょう}」で、生きたまま成仏することであり、「即身仏（ミイラ）」になった僧もいます。甲州出身の白道^{びやくどう}（1755～1825）も廻国聖、作仏聖^{ひじり}の一人で、人々の要望により造仏や加持祈祷を行ないながら、生涯各地を遍歴した木食僧です。白道は、主にそば粉を水でといたものを常食としていたと伝えられ、また、入定伝説も残っています。

木食白道について、青梅市文化財ニュース第 255 号「木食白道と地藏菩薩像」にて紹介させていただきました。白道の作品は山梨県を中心に 160 点以上現存しており、市内ではただ一点、住江町の延命寺にて白道作の地藏菩薩像が確認されていましたが、この程、千ヶ瀬町の宗建寺にも木食白道作の仏像があることがわかりました。

宗建寺所蔵の白道の仏像は、不動明王坐像（写真 1）に納入されていました。不動明王坐像は江戸期（18～19 世紀）の制作で、像高 17.0cm。その胴体部に空洞があり、そこに白道作の仏像（写真 2）が納められていました。

この白道仏は、像高 12.1cm、髪際高 8.1cm、ヒノキ材一木造りです。舟形の光背を負い、台座まで一材で彫出する形式や、肩から一旦すぼめて裾を広げる衣の表し方、頭髮と両足先を墨で着色する点や仕上げの粗さなど、作風が甲州市塩山の福蔵院所蔵の白道作の百観音菩薩像（天明 2 年、



1782)と酷似しています。背面には「南無阿弥陀佛」の六字名号と5枚の蓮弁(写真3)が記され、その書体より白道が作仏したものと知ることが出来ます。

この白道仏の尊名について、青梅市仏像調査概報Ⅲ(青梅市教育委員会、平成9年)では、如来立像となっております。しかし、白道の作例からすると菩薩である可能性も高い様です。類似する福蔵院の菩薩諸像のうち、手に蓮華を持っているものがあり、それらは全て像の左肩にかかる様に彫られておりますが、本像は逆に右肩にかかる様に表されています。持ち物も蓮ではないようです。

一般に如来や菩薩は台座が蓮華座であるのに対し、本像は岩座の様です。光背には筋が彫り込まれており、これに類する作例としては、白道仏の中で唯一の不動明王像(甲州市個人蔵)と呼ばれるものが挙げられます。持物の形状や持ち方も本像と酷似しています。本像の光背は朱色で彩色されていて、火炎光を表している様に見えます。また、白道仏はその殆どが「微笑」を浮かべているのに対し、本像は厳しい表情をしている点や、宗建寺の不動明王座像の中に伝わったという状況など、尊名を考える上で興味深いところです。

白道の仏は通例の仏像の像容に従わない独特の造形であることが多く、本像の様に作例の無いものは比較検討することが出来ないため、尊名を特定することが難しいようです。不動明王である可能性も高いと思いますが、如来、菩薩の可能性も否定できないため、現状では明確な尊名については不詳であるということになっております。

本尊の制作時期は作風の類似する福蔵院百観音菩薩像(1782～)と近い時期であると思われます。また、白道は青雲寺(現荒川区日暮里)の聖観世音菩薩本堂、鎮守金毘羅本社拝殿建立などのため、多摩地域にも勧進に訪れています。残されている史料より、寛政元(1789)年前後にその活動を行っていた様です。多摩地域で活動した際、宗建寺や延命寺に白道は仏を残していったと思われます。

なお、宗建寺の白道仏は通常は非公開です。白道仏の拝観を希望される方は事前に宗建寺までご連絡ください。

(文責 大久保 芳木)

写真2



写真3

